

陸上フェスティバル 壮行会でのことば（令和3年6月1日）

皆さんおはようございます。

明後日に控えた6年生が出場する陸上フェスティバルに向けて、校長先生から「火事場の馬鹿力」と「祈り」という二つのお話をします。

まず「火事場の馬鹿力」というお話です。

これは校長先生が皆さんくらいに幼い時のお話です。

ある日、小学校2年生の私は、友達と二つ年下の私の妹と近くの水路におたまじゃくしを取りに行くことにしました。

私の妹は体が大きくいつも姉と妹を逆に言われるほどでした。

その日一緒に行った私の友達はさらに体が小さく細く、

その日もお姉ちゃんに連れられた妹とその幼い友達と言った感じでした。

水路に着くとおたまじゃくしがいました。

頭のこんなに大きなおたまじゃくしです。

なかなか捕まえられずに苦戦していると、妹が私たちの方に駆けてきて、

「お姉ちゃん、あっちにたくさんいるよ」と言った後、

私の横をでんぐり返しをする様に過ぎて、水路に落ちていってしまいました。

水路に落ちた妹はもがくたびに底のヘドロに足を取られてどんどん潜っていき

とうとう顔だけが辛うじて出るようになってしまいました。

私の頭に妹が溺れて、

もしかしたら大変なことになるかもという考えがよぎった時、

私のかたわらでその小さく細い友達が

妹の手を掴んでいとも簡単に妹をその土手のへりに引き上げたのでした。

今になって考えても、あの小さな体に宿った大きな力は

「火事場の馬鹿力」だと思っています。

人は時にそうやって
何かをなんとかしたいと強く思う時、
普段もちえない力を発揮することがあります。

6年生の皆さん

これまでしてきた練習を信じて、少しでもよい成績を出すことをイメージして、
火事場の馬鹿力を期待してリラックスして挑んできてくださいね。
きっとよい結果が出ます。

もう一つは「祈り」というお話です。

だいぶ前に、とても有名な俳優さんが
がんという病気にかかり入院していた時のことです。

そのお兄さんは作家で

その時のことを自分の本に記しています。

その病気は深刻で、余命宣告と言って

生きられるのはあとどれくらいと

お医者さんに言われているくらいでした。

お兄さんはある日、あといくばくもない弟の命に落胆して、

弟が入院している病院を出ると、

そこで数えきれないくらいのたくさんの人たちが、

弟の病室に向かって祈りを捧げている姿に出くわします。

会ったこともない弟のために、一心に手を合わせて祈る人たち。

その後弟は宣告されていたよりも長く生きて、

皆に惜しまれながら亡くなりました。

しかし、その命が長らえたのは、

他にもない、あのたくさんの人たちの祈りが通じたのだと

お兄さんは確信したということです。

このように、人が人の行く末を心から祈る気持ちは通じると私も思います。

どうか1年生から5年生の皆さん、

代表で出場する6年生が怪我することなく、満足のいく結果を出せるように
心で強く、そして優しく祈っててくださいね。

6年生の皆さん、私は観覧席で、先生方も学校で祈っています。

きっとよい結果が出ます。

頑張ってきてください。